



Data

脚色・監督: 金綺泳 (キム・ギヨン)
 出演: 金芝美 (キム・ジミ) / 李正吉 (イ・ジョンギル) / 朴貞子 (パク・チョンジャ)

👁️👁️ みどころ

田村泰次郎の小説『肉体の門』やそれを映画化した作品は、大ヒット曲『星の流れに』の「こんな女に誰がした」の歌詞がピッタリだったが、本作のヒロインも、まさにそれ！

墮ちるところまで墮ち、殺人犯にされた女が、「なぜ男は女の体を欲しながら、使い捨てのちり紙のようにいとも簡単に放り捨てるのか。」と独白する姿は恐い！しかし、それでもなお女は「これが最後の運命の男！？」と期待するの？

文芸調メロドラマ作品もキム・ギヨン監督が演出すれば、こんなドロドロのすごい映画に！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 『肉体の悪魔』、『肉体の門』 vs 『肉体の約束』 ■□■

レイモン・ラディゲの小説『肉体の悪魔』（23年）は、私が学生運動に夢中になっていた当時の文学談義のネタとされた小説。それは、同作のテーマが「17歳の高校生と年上の人妻との禁断の恋」という際どいものだったからだ。その映画化はジェラルド・フィリップ主演で1947年にされている（『シネマ24』134頁）。

他方、田村泰次郎の小説『肉体の門』（47年）は、戦後の焼け野原になった東京を舞台に、当時「パンパン」と呼ばれていた売春婦たちの生態と抗争(?)を描いた小説で、子供時代の私が家にあつた本を盗み読みしていたものだ。『肉体の門』は、1948年のマキノ正博監督版、1964年の鈴木清順監督版、1977年の西村昭五郎監督版、1988年の五社英雄監督版の4作がある。

それらに対して、「キム・ギヨン監督には珍しい文芸調メロドラマ作品」と言われている1975年公開の『肉体の約束』とは？

■□■こんな女に誰がした？絶望的なヒロイン像に注目！■□■

映画『肉体の門』では、戦後すぐの1947年に菊池章子が歌って大ヒットした『星の流れに』のラストの歌詞である「こんな女に誰がした」がよく似合っていたが、本作の主人公（ヒロイン）も、前半30分でとことん男に騙され、底の底まで墮ちてしまった女スギョン（金芝美（キム・ジミ））。本作はナレーションの多用が目につくが、「なぜ男は女の体を欲しがりながら、使い捨てのちり紙のようにいとも簡単に放り捨てるのか。再び私を見下す男がいたら、私を騙そうとする男がいたら、私は2度と許さない」のナレーションは強烈だ。

殺人罪で懲役7年の刑を言い渡されて服役中のスギョンは今、2年の刑期を残して付添看守の女（朴貞子（パク・ジョンジャ））と共に列車に乗っていたが、これは一体何のため？そして、どこへ向かっているの？

■□■これが最後の運命の男！？もう1度信じるの？■□■

小説や映画にはさまざまな「純愛モノ」が、手を変え品を変えて登場する。その場合の最初の「出会い」もさまざまだ。しかし、本作がもし「純愛モノ」だとすれば、スギョンが「これが最後の運命の男！？」と考えた若い男フン（李正吉（イ・ジョンギル））との列車内での出会いに注目！松本清張原作の『砂の器』（74年）（『シネマ 43』343頁）や、『張込み』（58年）（『シネマ 10』16頁）では、長い列車の旅のひとつコマがストーリー形成の大きなポイントになっていたが、それはあの時代特有の「列車での長旅」があったためだ。

それは本作も同じで、スギョンが「愛の島」と呼ぶ故郷・梧桐島でのお墓参りを済ませ、再度刑務所に戻ってくる「特別休暇」の間に、新たな男との出会いによってスギョンの男性観は大きく変わるのだろうか？殺人犯の年上の女とまだ童貞の若い男との初恋～純愛というパターンは珍しいが、キム・ギョン監督はそれをいかに演出するの？それを本作で興味深く鑑賞することができたことに感謝！

2020（令和2）年3月30日記